

平成 24 年度

第 3 回

埋蔵文化財展示室更新検討委員会

議 事 録
(要 旨)

実施日 平成 25 年 2 月 12 日 (火)

実施場所 札幌市役所本庁舎 8 階 1 号会議室

平成 24 年度 第 3 回埋蔵文化財展示室更新検討委員会 会議要旨

<<会議概要>> * * * * *

1. 開催日時・場所

平成 25 年 2 月 12 日（火）18:00～20:00（公開）

札幌市中央区北 1 条西 2 丁目 札幌市役所本庁舎 8 階 1 号会議室

2. 出席委員氏名（五十音順、敬称略）

阿部一司、右代啓視、川名広文、越田賢一郎、小杉 康、古原敏弘、平間吉春

3. 事務局氏名

文化部長	杉本 雅章
文化財課長	本間 敬規
埋蔵文化財係長	仙庭 伸久
埋蔵文化財普及啓発担当係長	藤井 誠二
埋蔵文化財係	石井 淳
乃村工藝社	福田 良一、木野 聡子

4. 傍聴人

0 名

5. 会議次第

(1) 開 会

(2) 事務局説明

(3) 議 題

・展示室更新「基本計画」についての検討

(4) 閉 会

6. 会議資料

・埋蔵文化財展示室更新基本計画案資料 1～4

<<会議要旨>> * * * * *

1. 開 会

事務局説明

会議は、札幌市情報公開条例の趣旨に鑑み、公開で開催。また、会議要旨は、札幌市文化財保護審議会の公開に関する取扱要領に準じて取扱うこととし、要旨をとりまとめ次第、ホームページに公開し、併せて埋蔵文化財センター事務室に備え付けることを確認。

第3回検討委員会開催にあたり、加藤委員、深澤委員より、欠席の旨、連絡を受けたことについて報告。

2. 議 事

議題 展示室更新「基本計画」についての検討

座 長：本検討委員会は、今日で第3回になり、あと残り1回となってまいりました。大分、展示室更新の基本計画に向けてまとまってきておりますが、前回まで出ました色々な意見を事務局でまとめていただいていると思います。まず、それを説明していただいて、各委員の皆さんの意見を色々出していただければと思います。どうぞよろしく願いいたします。それでは、事務局の方から、まず、基本計画の説明をお願いいたします。

事務局：事務局からご説明させていただきます。まず初めに、前回も若干触れさせていただきましたが、平成25年度の予算につきまして説明させていただきます。平成25年度の予算規模に関しましては、明日から始まります議会で審議されるところですが、前回提示させていただいた更新計画で進めていくことができる規模と考えております。それでは、議題に入らせていただきますが、本日の資料に関しましては、会議レジュメのほか、1から4まで資料がございます。まず最初に、お手元の資料1に基づいてご説明をさせていただきます。

それでは、資料1の展示室更新基本計画から説明させていただきます。A3の資料1をご覧ください。表紙をめくりまして1枚目が展示構成リストになっておりますが、展示の平面のゾーニングとあわせて説明させていただきたいと思いますので、後ほどあわせて説明いたします。それから2枚目、これは前回も提示させていただきましたが、全体のイメージパースでございます。色調等につきましては、まだ検討段階でございますから、最終的には施工の段階で明確な色調を決めていくということになろうかと思っております。前回の委員会でもご意見をいただきましたが、壁面が黒っぽいイメージ、それから床に関しては、茶系のイメージということになろうかと思っております。3枚目が展示の平面図でございますが、これは寸法を入れた形、それから、どこの壁面をどう直すという図面ですので、これは後ほどご確認願えればと思います。4枚目が展示のゾーニングです。このゾーニングと先ほどの展示構成リストと見比べながらご覧いただければと思います。まず入りまして、導入展示と呼んでおりますけれども、正面に見えますのがシンボル展示。シンボル展示につきましては、市の指定文化財であります土偶を中心に、代表的な資料を展示していきたいと考えております。基本的には、全ての展示に関して入れ替え可能という計画で考えてございます。それから、土偶の左手になりますが、札幌市の埋蔵文化財についての説明、編年表と札幌での発掘の歴史という展示になっています。その壁面の隣がセンターの仕事ということになります。埋蔵文化財センターでの発掘の調査の流れ等の仕事をこの中で説明させていただきたいと思っております。それから、シンボル展示の後ろの壁面につきましても、正面から丁度背景になってくる関係がありますので、そこもシンボル展示ということで考えております。そこには、擦文時代の丸木舟

を展示するというを考えてございます。先に進みまして、平面図上で時計回りに展示を見ていただくという流れで考えておりますが、その先は通史による体系展示、時計回りで旧石器文化、縄文文化、続縄文文化、擦文文化、アイヌ文化というような形で展示を考えております。ゾーニングは、現段階では破線で大まかなボリュームという形で表現しておりますが、先ほども申し上げましたとおり、全体が可変展示になっておりますので、それぞれのボリュームにつきましては、展示更新するたびに変わることになるかと思っております。その部屋の中央に動かすことが可能な展示ケースが2台、それからジオラマを置く形になります。ジオラマのケースにも、キャスター等を取り付けて可動させる形で考えております。各時代の展示資料につきましては、展示構成リストにオープン時の展示資料として候補資料の遺跡名を示しておりますが、その内容につきましては、後ほど説明させていただく予定です。通史展示を終えまして、その先が企画・速報展示となります。ここは、埋文センターの方で発掘した最新の調査成果を提供していく、あるいは、年に何回か期間を決めて企画展示をそこで行うということで計画しております。最後が体験コーナーですが、ここは現状の体験コーナーをほぼそのまま改装なしという形で考えており、一部、体験アイテムとして、土器パズル等を新たに付け加えていきたいと考えております。

図面の5ページ目以降は、それぞれの壁面の展開図を示しております。右下に赤い字でA-Aという形で、立面の位置を示しています。壁面に横線が入っていて、そこに土器をイメージ的に配置しておりますが、実際の配置に関しては、施工の段階でレイアウトを決めていく形になります。壁面の中に代表的なグラフィック資料を、大体の寸法でレイアウトしております。ただし、実際は、当然資料のキャプション等も入ってきますし、解説プレート等もありますので、この壁面に関しては、主に実物資料、キャプション、解説を含む各種グラフィックというものが入る形になります。アイヌ文化期の壁面に土器が並んでいる絵になってしまっていますが、実際は主に鉄器等の展示になるかと思っておりますので、鉄器等の展示に関しては、既存展示台と書いてある展示台の上にアクリルケース等に入れた形での展示になるかと思っております。展開図は、あくまでイメージとお考えください。全体の平面と立面の展示の考え方は、図面でお示した形が基本になっておりますが、可変展示というコンセプトがございまして、実物資料、解説パネル等を自由にレイアウトしていこうという考え方です。今回お示したイメージは、あくまで一例ということになります。

それから、8ページ目ですが、グラフィックパネルのイメージを一部だけ示させていただきました。これはアイヌ文化期のところですが、展開図の中で、6ページ目の上のCの展開図の中にアイヌ文化期の解説ということで1枚出させてもらっていますけれども、コーナータイトルが、高さ15センチ、幅60センチというサイズのものと考えておりまして、そのコーナータイトルが8ページ目の左上に書いてあるものです。色合いや最終的なデザインは施工の段階で決めていくこととなりますけれども、このようなデザインイメージとして考えております。それからその下に、旧石器からアイヌ文化期まで通した形のバー表示ですが、該当時期を強調して、全体の時期区分のこのあたりがアイヌ文化期ですというようなことで示したいと思っております。その下に書かれておりますのがパネルのイメージです。縄文、擦文といった各場面に関しましては、内容を詰めていく施工の段階で、レイアウトが多少変わってくるようになるかと思っております。寸法につきましても、内容によっては変わってくる可能性があるかと思っております。各コーナーの時代の解説につきましては同じ寸法で統一していきたいと考えておりますが、そこは内容を盛り込む段階で決めていきたいと思っております。

資料の9ページ目は、グラフィックに掲載する文章の案として提示させていただいており

ます。グラフィック関係に関しましては、アイヌ文化期だけではなくて、他の時代を含めて全体について、実際には実施設計段階でその内容を詰めていくということになると思うのですが、今回このような形でグラフィック案をお示ししたのは、少なくとも新たに設けることとなっておりますアイヌ文化期の展示におきましては、委員の皆様のご意見を伺う必要があるということの考えからお示しさせていただいたものでございます。資料の9ページ目に、幾つか箇条書きで示しておりますが、これらはあくまでも案としてお示ししております。このような趣旨で記載するというのでございまして、これをそのまま使うということではもちろんございません。当然文章の内容ですとか文言等につきましても、展示室の対象としているのが小学校高学年ということで設定させていただく形になりますので、今後、この文章をもとに修正していく必要があるものと考えております。

まずは、ざっと読み上げていきたいと思っております。全体を3項目に分けておりまして、一つ目がアイヌ文化期について、二つ目が札幌市内におけるアイヌ文化期の遺跡、三つ目がアイヌ民族について、という3項目にしてございます。最初は、アイヌ文化期についてというところで、「北海道における中・近世の様相は、アイヌ絵や紀行文、探検報告等の記載・地図、民俗学・考古学などの調査・研究によって、徐々に明らかになりつつあります」。これは、北海道埋蔵文化財センターで平成16年に出版された「遺跡が語る北海道の歴史」から引用したもので、若干加筆・修正をしております。次に、「現在、考古学による北海道の時代区分としては、擦文時代以降、近世までの時期を、「アイヌ文化期」と呼称しています」。三つ目は、「この時期（現在は、概ね13世紀以降と考えられています）、これまで蓄積されてきた各種の研究成果などによれば、基本的に擦文文化やオホーツク文化を継承したアイヌ文化の形成・展開されていたと考えられています」。こちらも同様に引用文になります。次が、「札幌市内における当該時期の様相についても、大きくは同じ流れの中にあっただものと考えられますが、残念ながら、札幌市域に関連する文献資料や民俗学・考古学的な資料に乏しく、詳しいところはわかっていないのが現状です」。次が、「考古学的に見ると、現存する近代以降のいわゆるアイヌ民具と、遺跡から発掘されるアイヌ文化期の出土品には、年代的な問題や相違点も多いため、まったく同じものではないといった指摘もあり、直接結びつけることは難しいと考えられています。擦文時代以降、土器が使われなくなることや、竪穴住居を作らなくなることなどから、物質文化・生活様式の異なる文化が成立していく時期と捉え、考古学的な北海道の時代区分を「アイヌ文化期」としています」。次の札幌市内におけるアイヌ文化期の遺跡というところですが、一つ目が、「札幌市内では、近年の発掘調査で、少しずつアイヌ文化期に相当する遺跡が見つかってきています」。二つ目が、「札幌市内では、アイヌ文化期のもと考えられる主な出土遺物として、太刀、山刀、刀子、鉄鍋、鋤先、小札、釣針、古銭などの金属製品や漆器、陶磁器などが発見されています」。次が、「札幌市内で発掘調査が行われ、アイヌ文化期に相当する遺構・遺物が見つかる主な遺跡は、K499遺跡（北区篠路1条10丁目）、K501遺跡（北区篠路2条9丁目）、K503遺跡（北区拓北2条1丁目）、K518遺跡（北区北25条西11丁目）などがあります」。次が、「詳しい時期は判明していませんが、K483遺跡（北区新琴似町）では、近世アイヌ文化期に相当すると考えられる漁撈遺構や丸木舟の破片などが見つかっています」。次が、「札幌市内では、発寒チャシ跡（西区山の手7条8丁目）、天神山チャシ跡（豊平区平岸1条18丁目）の2カ所が、アイヌ文化期のチャシ跡として掲載されています。発寒チャシ跡は、宅地開発により、現在その姿を見ることはできませんが、天神山チャシ跡は、壕の一部が現状保存されています」。次に、アイヌ民族についてという

ことで、「アイヌ民族の起源については、これまで形質人類学や遺伝子工学分野などから、さまざまな学説が唱えられてきました。人類学的な研究では、アイヌの持つ形質や遺伝的な特徴の中には、縄文時代まで遡るものがあるといった説や、DNA解析による分析も進展しており、総合研究大学院大学と東京大学の研究グループによれば、「旧石器時代・縄文時代以来の先住民と大陸からの渡来民との遺伝子交流がひんぱんに生じたが、北海道を中心に居住していた人々は農耕を受け入れず、独自の文化をその後も維持して、その後、アイヌ文化を生み出していった。」といった研究成果も発表されています。また、アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会では、「北海道のアイヌは、単純に縄文人の末裔と位置づけることはできず、縄文人を母体としながらも、歴史の中で周辺集団との交流を続けながら変化し、分化していった集団であることを、最近の形態学的な研究は明らかにしている」といった見解を示しています」。以上、案として提示させていただいたものです。

その下の図・写真等というのは、埋蔵文化財センターで所蔵している資料をもとに、図や写真で表示していくものの例として幾つか挙げさせていただいております。長くなりましたが、以上が基本計画の説明でございます。

座長：どうもありがとうございました。盛りだくさんなので、ちょっと二つに分けて検討したいと思います。一つは、平面図と立面図、これをもとに1ページ目から7ページまでの展示内容を最初に検討していきたいと思います。この関係での何かご質問、確認などございませんでしょうか。このあたりは、前回までも出ていた部分ですけれども。

事務局：一つだけ補足させてください。前回の委員会の中で、6の体験コーナーの、図面で言うと右角上の柱を撤去して空間的に丸みを付けたらどうかというご意見があったのですが、事務局の方で現地調査をしたところ、その柱1本だけを撤去するというのが難しい構造になっておりまして、それを撤去するには、そこ以外の部分に手を加えなければいけないということがわかりました。申し訳ございませんが、現状では、柱は残す方向で考えております。

座長：予算の関係もあるということになりますね。

事務局：はい。

座長：これは、前回、取り除いたら雰囲気が変わるのではないかという意見もあったのですが、これは難しいということですね。一つ、シンボル展示のところですが、これは表も裏も見られるという形になるのですね。透けて見えるということですね。

事務局：展開図面の7ページ目の左下に表面と裏面からの絵が書いてありますが、ケースそのものは透明ガラスなので、四方から見られるという形で考えております。

座長：正面から入ったときに、そのバックになるものは何ですか。

事務局：奥は壁になるのですが、展示構成リストで示している木製品です。丸木舟をシンボルとして展示したいと考えております。

委員：設計上のプランのことではないのですけれども、1ページ目に展示構成リスト案がありまして、ここでは、例えば展示コーナーというところで「時代」という言葉を使っていて、4ページ目では「文化」という言葉を使っています。さらに、8ページ目のアイヌ文化期を例にした時間のスケール、インデックスですか、こちらには「時代」がある。ここは「時代」と「文化」の使い方を統一するのか、併用するのか、混用するのか、この辺はどんな見解なのでしょう。

事務局：現状では、すべて「時代」に統一する考えです。基本的に、「文化」という言葉は使わない考えです。アイヌ文化期については、アイヌ文化期という言葉で使おうと思っています。

委員：参考までに、その根拠というか、理由というのは何かあるのですか。慣用的な使い方とい

うことですか。

事務局：そうです。

座長：考え方として、「時代」、「文化」をどう使っていくかということはすごく難しいことだと思いますし、また、恐らく質問などが出てくるところだと思いますので、これは少し考え方をまとめておいた方が良いでしょう。特にこれから8～9ページになりますと、アイヌ文化期という名称が出てまいります。この名称なども検討委員会の中で検討しておかないといけない話だと思いますので、8～9ページも含めて皆さんのご意見をいただければと思います。ただ、ここでは一言一句をやるということではなくて、考え方、基本計画の中で、説明を求められたときにアイヌという時期区分をどう考えているのか、それから、アイヌ文化期、アイヌ民族というものをどう受けとめているのか。これは、ある意味では、札幌市としての姿勢を問われる部分もあるかと思っておりますので、この中で市の意見と、検討委員会の意見とをもう少し出し合っておいた方が良いでしょう。時期、文化期というような言葉とアイヌ民族という表現などに関してご意見ございませんでしょうか。

委員：例えば、この辺の共通の考え方を委員として同じような形で持っていないと、質問があったとき困るのではないかと思うのですね。その辺はやはり検討しておく必要があると思いますね。アイヌの中でも、他の人からも色々聞かれることがあっても、基本的には民族の中にはそういう文字や文章が無いものですから、結局は書かれた書物や現在の知見でものを判断する訳ですけども、そこで、やはり本州とは違うのだということがこの北海道にあると思うのですね。そこら辺をアイヌ民族、アイヌ文化というものとどういう具合に時代と結びつけていくのかということだと私は思っているのですね。本州では縄文時代が終わって、次に今度は弥生、古墳となります。北海道の場合は、弥生とか古墳とかそういう文化が無い訳ですから、そういうときに時代と文化という考え方はどうやって説明するのかというのは、僕ら中々そういう専門家ではないのでわからない訳ですけども、おっしゃるとおりだと思うのですね。

座長：ここに引用している北海道埋蔵文化財センターなども、こういう時期区分、年表などは文化という言葉で統一しているのですけれども、教育委員会などである程度検討をして具体的な話になります。今、通例としては、ここに挙げたような時期区分が使われているのですけれども、あえてそれを使うということで一致するのか、あるいは、ここで変えた方が良くなれば、思い切って年代表記を変えてしまおうというような意見があれば、またそれも良いかと思うのですね。特にアイヌ文化期というのは、何でここだけ文化期という用語を使うのかというのが、今まで色々言われてきました。ですから、ある程度意図を持って使うというような形が出せれば良いかと思っています。それからアイヌ民族をどうとらえるのか、この辺についてもう少し意見を伺いたいと思います。

委員：私は原則として、考古学的に認識できる対象に対しては、時代は使わないで文化で通しています。時代というとその主体がありまして、その主体が過去に振り返ったときに、それを時間的に区分しているという意味合いがあって、ですから、日本という前提があって何々時代というような形で時代区分というのがなされている。学術的にいうと、今から何年前というのがわからない研究段階ですね、縄文時代とか原始時代という言い方もそうなのですけども、それがある程度歴史的な深さを持つ時間の尺度として使われていたことがあります。現在では理化学的な年代測定法などが普及してきて、今から何年前という、まさに年代観がわかってきた現代においては、何々時代というような、原始、古代においてそういう時間の尺度として時代法を用いるというのは、20世紀前半的な認識方法だと理解しています。だか

ら、日本というのを主体にした上で何々時代という、鎌倉時代とか平安時代とか、考古学的に捉えられる対象に対しては、文化と言った方が良いのではないかと。そして、それに対して今から何年前から何年前というような年代表記をしていくのが、学問的には最も先入観に囚われないやり方だと理解しています。ただし、これは学会でも大勢ではなくて、学会ではどうかというと、時代と文化というのを併用ではなくて混用しているのが実態だと思います。一人の書く論文の中にも時代と文化というのがほとんど意識されないままに使い分けられている。文脈の関係で使い分けられているというのが事実だと思います。幾つもそういう文献を実際に見ておりますし、手元にもそういうのが資料としてあります。そういうことで、私としては、文化として使うのが良いかと思っています。ただし、実際にはそんな簡単ではなくて、これは私より詳しい専門の領域を研究されている方がおるので、コメントをつけていただければ良いかと思っています。考古学の方では、アイヌ文化期という呼び方が北海道の場合では比較的通っているかと思うのですが、これは現在において捉えられるアイヌ民族、あるいは文献等によって捉えられるアイヌ民族ですね、それと考古学的に捉えることができるアイヌ文化等を区別するような意味合いでアイヌ文化期と使われている場合が多いのではないかと思います。ですから、例えば北海道で縄文文化と言ったとき、その時間を表したいときは縄文文化期と呼べば良い訳ですね。あるいは、略して縄文期でも良いかと思っています。あるいは続縄文文化期、続縄文期でも良いかと思うのですが、そうなるとアイヌ文化期に関しては、アイヌ民族と区別する意味で、考古学的に捉えられたという意味でアイヌ文化期と言っているのが、今度はその使い方ができなくなってしまうという、文化に統一した場合ですね、そういう問題もあるので、一朝一夕にはうまくいかないのですけれども、用語の問題としてはこんなことはないかと考えております。

それと、関連するのでもう1点言わせていただきたいのですが、このアイヌ文化期を事例にしてパネル解説がありますね。前回も出た意見だと思いますが、どの時代、いつの年代を対象にしているのかがわかりやすいようにということで、恐らくこの名称の下に時代スケール、時間スケールというのが先ほど説明がありました。これもイメージ的なものだと思うのですが、この長さがどの程度、実際、現在、年代観を把握しているのか。総体的には縄文は長いと、旧石器はもっと長いという意味で、旧石器は端折るマークがついているかと思えますけれども、実際の現在わかっている時間尺度はもっと違ってきますよね。ただ、そうすると字も書けなくなってしまうというような短い時間もある。ここら辺をイメージとして伝えるのか、そうではなくて、もっと時間的な長さを考慮した形で伝えるのかというようなことも具体的な話し合いが必要かと思っています。今、名称の問題も時代区分の問題も関係するかと思いますので、以上です。

座長：今、時代区分の文化と時代の問題、それから、時間軸を表すときにそれをどう表現していったらいいのか、特に旧石器時代も北海道だけで言うのか、日本的に言うのか、その書き方で全然違ってしまいうという難しい部分があります。逆に、等間隔で切ってしまうという場合も考えられますし、そういった意見が二つ出されました。どちらも大変難しい問題なのですが、もう少し他の委員のご意見を伺いながら議論を深めていきたいと思っています。どうしてもこれは必要な議論だろうと思います。どなたかご意見ございませんか。

委員：開拓記念館は、文化を使っているのですね。それは、先ほどの意見と同じ考えです。いわゆる日本国の中にどう組み込まれていったかということで時代を使っています。特に、北海道では松前時代という時代を使っているのですね。それ以外は、北海道的な時代区分はないと考えています。ですので、そこら辺をきちんと考えていけば、文化が良いかと思っています。

す。ただ、慣用的に使うのであれば、時代というのも良いのかなと思いますけれども、考え方は統一された方が良いと思っています。スケールの問題は、見せ方だと思うのですね。それは展示のテクニックで、どういうふうに見せるかで、タイトルパネルに入れるのか、それとも、展示ケースの中にスケールのものをきちんと入れていくのか、それを整理すれば、見せ方で整理できるかと思いました。

事務局：入って左の壁面にきちんと編年表の表現をしようと思っております。その編年表に使う、例えば色合い、縄文はこんな色、擦文はこんな色という色合いに合わせて、コーナータイトルの表現をインジケーターとして表現したいと考えております。この中で明確な時間軸の長さまで表現するのは難しいと今の段階では思っております。もう少しきちんと編年表と併せて検討していきたいと思っております。

委員：一般的に見て、その時代はどこ前後関係にあるかということのをそのところで確認できれば良いということですね。

事務局：コーナータイトルの中ではそのぐらいの確認で良いのではないかと考えています。

委員：しっかりした表示は展示ケースの中で行うということですか。

事務局：編年表の中できちんと表現したいと考えています。

座長：今、時代というのは本州の方の時代で使う、そして北海道では文化を使うという意見が出されました。それからスケールについては色々な見せ方という考え方。他の委員の方はいかがですか。

委員：私は、そういった年表的なものは数字で表記してもらったら非常にわかりやすいなというふうに思うのですけれども、今のお話を聞いていますと、中々はっきりした年代が示せないということであれば、それもやむを得ないのかなと思います。ただ、見る立場に立って考えると、そういうところへ行ったときに、それぞれここはこういう考えで時代区分だとか年代を表しているということが、どこかに表示してあればわかるのだけれども、やはり、今のアイヌ文化期も含めて、この展示物全体の中でいつの時代なのか、いつ頃なのかということを知りやすく表示して欲しいと思います。私は、時代でも、文化期でも、文化でも良いのですけれども、ここに書かれている事柄が、例えばアイヌ文化期という言葉はいつ頃から使われるようになったのかとか、我々が子供の頃は、そういう習い方はしていませんでしたから、大人になってアイヌ文化期という言葉を知ったときに、いつ頃からそういう言葉が日常的に使われるようになったのかなど。それから、ここに書かれている説明が、具体的に正しいのかという素朴な感覚があるのですね。ですから、具体的な数字で説明というか、続縄文時代というのは大体このぐらいからこのぐらいですよというのが書いてあればという思いがあるのですね。ここに今新しい展示室をつくって、10年、20年後を考えたときにどうなっているのかなというのがちょっと気になりました。北海道開拓記念館にしても、こういう考えで北海道は時代を使わないで文化期という言葉を使っているという説明があって、初めてなるほどと思うけれども、その辺を統一することができるのかなという、率直な気持ちありますね。長くなって申し訳ないのですけれども、結論としては、私は是非、数字でも表示してもらいたいということです。

座長：今の時代区分のというのは、歴史をやっている学者にとっては、究極の目的みたいなもので、最初にあって最後にあるものだと思うのですね。ですから、ここで結論を出すのは難しいのですけれども、まずこういった時代があるのだよということを示さなければいけないときに、一番わかりやすい名前を使う。それを今回は文化を使うか、時代を使うか、これは恐らく10人に聞いたら皆それぞれ違う意見が出てくるだろうと思います。ですから、これは

委員の方から意見を出して、後は行政的にまとめていただくしかないと思いますが、いかがなものでしょうか。

委員：資料の中に、例えば、アイヌ文化期のものと考えられる遺跡の中から色々な遺物が出てきていて、出土遺物の中に刀とか古銭とかあるのですけれども、去年も、ある芝居をした人たちとか能なんかをやったのがあったのですけれども、そういう中で、刀を持って戦いをするような場面が出てきたりして、別な芝居では刀を抜きたいな、そういう争いの、まるっきり日本人みたいなことをやる訳ですね。出てきたから、刀があったから、これはアイヌのものだということを一般の人が誤解しないようにした方が良いと思う。古銭にしても、これは使った訳ではないので、その辺をわかるようにしないと、今の子供たちにそういう芝居を見せたりなんかして、刀を抜けほら、とやってしまうと、全くそれはアイヌとは違うことになってしまうので、出てきたものは確かに出てくるのだけれども、それは交易で出てきたとか違う形、生活のものではないと思うのですね。その辺をやはりわかるようにした方が良いと思いますね。

座長：本州では刀は刀としてしか使わないとか、アイヌの人たちはそればかりではなくて、色々な意味にも使うとか、古銭などは特にそうですよね。お金を使うというのと全然違う訳ですから、そういったことがわかるような展示をして欲しいということですね。

委員：北大で去年見せていただいたのは、お墓から持ってきたと思うのだけれども、両刃の刀がありました。それは700ケースぐらいあるうちの一つですが、両刃の剣ですから、あれは日本のものではないですね。きっと大陸からここに入ってきたものだと思うのですけれども、そういうのがもしあったときに、札幌では、それを間違っただけでアイヌが使っていたというふうにして市民が誤解したら困るという意味で。

委員：アイヌ文化期というのは難しいと言えば難しいし、時代というのはちょっと何かひっかかるものがあるのですね。大分昔からアイヌ期だとかアイヌ文化期という言い方が一般的に使われていますし、時代区分では問題だという部分ですから、一概に結論は出せないなとは思っています。一般の人に説明するときには、最後にあるような文章が一番やりやすいと言えばやりやすいという話ですね。ほとんどアイヌ文化期という言葉で説明していますので、このぐらいの説明でやるしかないのかなと思います。それと、今の話にも関係するのですが、実はこのアイヌ文化期と言われる出土品はほとんど移入品、アイヌ自ら作って使ったものというのは有機質のものがあるという意味で、ほとんど残っていないので、これももう一つ何か説明を加えておいた方が良いかと思えます。あまり長い説明はもちろん避けた方が良いでしょうが、でも、説明としてはきちんとしておいた方が良いという気がします。この主な遺跡というのは、ほとんど時代がわかっていないのですよね、大体この範囲というくらいで。近世の民具と出土品とは、ちょっと雰囲気違うので、何か一言説明あった方が良いのかなという気がします。遺跡の分布で言うと、アイヌ期の遺跡は川に近いところとか、河岸段丘の低いところとかに集中すると思うのですが、他にどこに集落があったのかというのはわかっていません。だけれども、シャクシャインの頃には、もうアイヌ語の地名として残っていますから、アイヌ文化期と称しても良いだろうなと思っていますが、説明はやはりつけ加えた方が良いという気がします。

座長：ちょっと質問ですが、近世、近代のアイヌ民具と中世から出てくるものというのは、どういったところの違いが大きいと考えられますか。

委員：有機質のものは残っていないので難しいですね。美々（遺跡）で出てきたものには、樹皮製のものが出てきたりしても、古い伝世品には無いとか。北海道のそういうところと、そし

て、そういうものの変化の中でも多分、実質的な変遷があるのだと思うのですが、今、そういった部分をどう説明するのかというところもありますしね。例えば樺太の犬ぞりなんか、北海道が犬ぞりの原点というのでも知られていないです。でも、樺太と北海道と流氷が来る場所を思い浮かべると同じような自然環境が整っている訳ですから。もしかすると使っていたのかも知れないけれども、北海道ではわかりません。考古学的にもそういうものは出てきていないですし。

座長：ここは埋蔵文化財センターなので、出てきたものでこう言うとか、逆に物をとおして、今のアイヌ文化と比較していくというしかないのでしょうかね。

委員：刀だとかこういうものは、今でも伝わっているものも含まれています。

委員：前後関係で比較するしかない。

委員：今出てきているものではこうですよという、そういう説明しかできないですね。

座長：それまた、今の、今のというまた、これが難しいですよ。だから、いつの時点のものというのがどこかあれば良いですけどね。

委員：100年前とか200年前とか過ぎればもうちょっとあるかも知れないですけどね。

座長：例えば150年くらい前の文献の絵なんかと比べるくらいのことやっておけば、まず一つは良いのかなという気もするんですけども、その見せ方が難しいですね。

委員：難しいですね。それと同じようなのが出ていけば良いんですけども、中々出ていない。

座長：非常に大変なのは、出ているのが金属製品などで本当に本州から入ってきたものなので、これをどう使ったのかということを見せないと誤解されてしまう。

委員：物として入ってきてはいますけれども、使われ方としてはアイヌ流といいますか、その使われ方になる。

座長：先生方としては、そのあたりが一番問題だということですね。

委員：新しい時代が少しかぶる可能性はあるんですけども、確かに短い文章の中でどこまで説明するのかというのは難しい。

委員：難しいですね。例えば、アイヌのコタンというのがわかっていて、そのコタンから出たものだというのと違う訳ですよ。だから、結構難しいですよ。その比較が、あるいはチャシから出たとか、そういうのではないですね。

委員：資料に書かれている出土遺物、これ全部本州から入ってきているものですよ。

座長：それぞれ説明しないと、小札なども何かいわれがあったのかという話にもなりますしね。この辺が本当に見せ方の難しいところだと思います。

委員：大きいパネルで見せるにしても、下の方に、キャプションはやはり必要かと。

座長：一応、アイヌ文化期は一般的に使われているので、これで良いのではないかとということによるのでしょうか。他にいかがですか。

委員：今、お話聞いて、折角ですから、そういうアイデアがあるなら、文化期というのを思い切って使ってみるのも良いかなと思います。本州の人からすると擦文時代と聞くとちょっと違和感があるので、擦文文化と言った方が何か違うものがあるという感じがして良いのではないかなと思います。

座長：今、文化を使おうという方が3人ほどいらっしゃる。私見ですが、確かに、大体、縄文時代、弥生時代、古墳時代と続いていく本州の時代の使い方自身が、文化の時代と政治の時代とが入り混じっているんで、本当に良いのかなという気はするのですが、それなりにずっと使ってきたものは否定できない。そうすると難しいのが、縄文時代は本州と同じで共通しているのに、何で北海道だけ縄文文化なのかということになってしまう。逆にその後の続縄文

文化とか、それから擦文文化とか、こちら辺は時代というだけのものがあるのかなということですね。北海道が何でオホーツク文化と擦文文化と並行であるのに、何で片方は文化で、片方は時代なのだという、そういう問題も出てくる。私も、自分で書いているときには、両方ごちゃ混ぜに使っている部分がたくさんあります。ですから、北海道の中では、私は文化を使っておいた方が良いのかなという気がしています。それからアイヌ文化期も、近世から近代にかけて色々知られているアイヌ文化というのがそこにでき上がっていく、その過程が中世から近世にかけてだと、そういった一つの時代的なものを代表させてアイヌ文化期という言葉を使う。そして、明治以降というのは、これはアイヌ文化期が残っていても、全国的な政治的な区分になってしまうので近代を使うと考えています。それを市の埋蔵文化財センターとして、聞かれたときに同じような言葉で説明できれば良いかと。それから、今の状態でもわかると思うのですが、全体意見という形ではない、個別意見の形でまとめていただくということでもよろしいでしょうかね。委員の方も、統一意見という訳には中々かないですよ。今の意見を聞いて、時期区分をまた考えていただければと思います。それでは、ここで5分ほど休憩を入れたいと思います。

(休 憩)

- 座 長：それでは、続けさせていただきます。先ほど、議論をちょっと切ってしまったのですが、委員の方から、アイヌ文化期の文章の中で聞きたいことがあるということですので、少し続けさせていただきます。
- 委 員：まだ案ということですが、アイヌ民族についてのところで、総合研究大学院ですか、あと東大の研究グループからの引用ということで文章が紹介されていますけれども、この中で、北海道を中心に居住していた人々は農耕を受け入れずということなのですか、こちら辺の評価は今どうなっているのでしょうか。
- 座 長：どこの時代のことを言っているのですかね。
- 委 員：専門関係でもないとわからないですね。
- 座 長：だけれども、アイヌ文化期でも農耕をしていたということになっていますし、それこそ擦文文化なんかですと札幌の遺跡からたくさん農耕に関係した種子が出ています。
- 委 員：続縄文文化とかこちら辺のこと、よくわかりませんが。
- 委 員：その前の文章にDNA解析によるとということもあって、その後に総合大学院との引用が来るので、何かこちら辺はちょっと。
- 座 長：このグループのは、DNA解析をしたグループですよ。
- 委 員：そうですね。ですから、食性分析なんかは今できますよね。そういうことも含めての配慮としても、農耕、つまり穀物を食していないというような理解をされる方も出てきてしまうのかと思うのです。実際に展示するであろう資料の方から言っても、農耕を受け入れずというのは中々言えないのではないかと思います。ですから、引用の仕方としては、この文脈ではあまりそぐわないのかなと思って。案ということで、これから変わってくるのかと思うのですが、ただ、どこで変えるかもわかりませんので確認させていただきました。
- 座 長：これも、コラーゲンの分析で、北海道は漁撈、海の動物が中心だという分析が出ているのでこういうふうに使っているのですよね。
- 委 員：ただ、それも色々議論があって、例えば海岸部に暮らす人たちの骨を分析すれば、当然そういう結果が出て、内陸部ではまたそういうデータが無いのです。ですから、一概にそれだ

けをとってはいけないという学問的な領域の中ではそういう判断をしている訳ですね。

座長：今、貝塚の骨ばかりやっていますからね。ですから、確かにこの人たちの言い分もあるのですけれども、本当に農耕が無いのかというと、今、考古学的には言えない部分もあるので、そのままの引用はちょっと苦しいかも知れないですね。

委員：アイヌ民族、一般的な示し方で良いかなと思っています。文章が難しいですね。

委員：このところは私も最初見たときはひっかかっていたのですけれども、弥生時代になったということは、農耕を、お米とかが本州はできたけれども、やっぱり寒さとか色々なことがあってできなかったということもあると思うのですね。それを受け入れないと書いてあると、何か絶対嫌だよと言ってやめたみたいな、今おっしゃるような捉え方になってしまうので、それはちょっとどうかなというような感じはしていました。その後は、今おっしゃったように少し住居の近くでやっていたけれども、ずっと昔からある訳ですから、それを受け入れなかったということ、ちょっと変だなと思っているのですね。

座長：この部分は、このまま出す訳ではないと思いますので、また次回にでも、少し丸めたような形で示していただけるとありがたいと思います。その他に何か、この文言の中で問題になることございますか。

委員：民族というのは、フォークロアを使うのか、エスノロジーを使うのかということでしょうか。ここではフォークロアを使っている。アイヌ文化期についてというところで。それとあと次のところで。

座長：2行目のところの民俗学。

委員：2行目と、あと中の方、時代区分と書いているところをどうするのか。時期区分にするのか、時代区分にするのか。擦文時代というのをどうするのか。そういうことです。次の札幌市内におけるアイヌ文化期の遺跡のところですけども、一番上のところで、近年の発掘調査でと書いてありますよね。近年っていつの近年なんだとなるので、これまでのとか、そういうふうにはぼかした方が、10年とか考えるとそういう表現にした方が良いかなと思います。

座長：民俗学と民族学と、これは今、どちらが普通なのでしょう。

委員：学問的にもきちんと明確になっていないですから。

座長：民族をとということで統一しておいた方が。

委員：民族同士の比較研究をするのであればエスノロジーですね。

委員：基本的には同じです。調査の中身によってはフォークロアを使うということはあるんですが。

委員：アイヌ民族の中の比較研究であれば、民俗学。

座長：普通はエスノロジー。特に異論ございませんか。これは民族学に統一した方が良いかと。

委員：それと少し戻りますが、展示リストで展示コーナーのところなのですけども、展示コーナーの説明が右側のところにあるのですが、例えば旧石器時代のところは、「旧石器時代の人々の暮らしについて解説する」だけしか書いていないですね。できれば、いわゆる札幌らしさという展示のところ、何が札幌らしさの旧石器なのかとか、何が札幌らしさの縄文時代なのかとか、そういうところをここに示していただいたら、よりわかる展示になるのかなというふうに思いました。特に札幌ではこうですとか、何かそういう札幌らしさが、ずっと話題になっていると思うので。

座長：これだけだとこの郷土館でも通用してしまうという形になってしまう。

委員：そうなのですね。

座長：他に何か、これまでのところでお気づきになったところがあれば。よろしいですか。では、続けて資料2の基本計画、これが具体的に次回に向けて検討される話になりますので、事務

局の方から説明をお願いいたします。

事務局：それでは、事務局から資料2の説明をさせていただきます。資料1と資料2とあわせた形のものが、最終的に基本計画ということになります。今年度の目標として、基本計画の策定ということがございますので、昨年度に策定いたしました基本方針を踏襲した形の基本計画ということで取りまとめたいというふうに考えてございます。

それでは、資料2をめくっていただいて、目次を見ていただきますと、第1章から第4章につきましては、基本方針の内容ということになりますが、記載としては、文言等を少し整理して掲載しています。内容につきましては昨年度に整理した部分ですので省略いたしました。第5章の埋蔵文化財展示室更新の基本計画というところを新たに追加しているという形になります。読み上げながら進めさせていただきますが、基本計画の1番、展示計画の考え方、埋蔵文化財展示室更新基本方針に基づいて、既存の展示室空間を六つの空間に再構成し、展示スペースを増やすとともに展示品の刷新と充実を図ります。ということで、その下に、六つのコーナーを枠で囲みまして、視覚的に表示をしています。2番、展示構成のポイントということで、1番の部分を言葉で説明した形になるのですが、①シンボル展示。札幌市指定有形文化財を中心に、市内で発見された代表的な埋蔵文化財を象徴的に配置し、視覚的な効果を演出します。②札幌市の埋蔵文化財。札幌市における発掘調査の歴史を紹介するとともに、市内の遺跡分布や編年表をとおして、過去の空間的・時間的な概要を把握してもらい、感覚的な効果を演出します。③札幌市埋蔵文化財センターの仕事。札幌市埋蔵文化財センターの設置趣旨、役割を表示するとともに、センターでの仕事を紹介し、文化財保護の理念、埋蔵文化財行政の意義を解説します。④通史による体系展示。旧石器時代からアイヌ文化期まで、順を追って実物資料とグラフィック解説を配置し、札幌の過去数万年間を追体験してもらいます。また、各時代毎の札幌の地域的な特色を織り交ぜながら、歴史への理解を深めます。⑤企画・速報展示。最新の発掘調査成果をいち早く紹介する市内発掘調査速報展や、収蔵資料を活用しながら様々なテーマで企画展示を行い、埋蔵文化財センターの活動や研究成果をトピック的にお知らせします。⑥体験コーナー。パソコンを活用し、札幌市内の遺跡紹介や、クイズ、土器づくりや石器づくりを疑似体験できる情報ツールを設置するほか、火起こし道具や土器パズルなどの体験アイテムを配置し、歴史への興味や学習意欲を促します。また、関係他館等の情報を提供します。そして、この下に更新後の平面配置図を配置します。

次に、3の情報計画ですが、前回提示させていただいた情報計画の図面の中に文章で書かれていたことを再度整理した形になります。①わかりやすく：展示室内に表示する情報を再構築して新たな知見を盛り込むとともに、情報の階層を明確化し、札幌の歴史の流れをわかりやすくします。②おもしろく：システムパネル導入により展示スペースを増やし、実物資料の展示と解説グラフィックを充実させるとともに、来館者の興味を引くデザインで展示室空間全体の調和と統一を図ります。③やさしく：サイン、グラフィック、外国語表記を充実させるとともに、展示位置、文字サイズ、ルビの表示など、ユニバーサルデザインの考えに基づいた情報提供を行います。④情報更新性の確保：常設展示の資料入替や、新たな調査成果・テーマ企画など、最新の情報提供ができるように、各種フォーマット・ツールを充実させます。

次に4番の運営計画。①埋蔵文化財展示室を中心とした普及啓発活動を充実させていくために、年間計画の策定・管理を行い、周知していきます。②北海道内・市内の関連施設を紹介するとともに、関連施設との連携を図り、市民への情報提供を充実させていきます。以上

が、第5章になります。

第6章につきましては、これも方針と同じになりますが、25年度、26年度の計画予定を記載しているということになります。以上が資料2の説明になります。

座長：ありがとうございました。それでは、資料2についての質問、意見などございましたら、各委員の皆さんから出していただきたいと思います。今まで検討してきたことが盛り込まれているかどうかということと、何か表記などでこうなのではないかということがございましたら、意見をいただきたいのですが。

事務局：ちょっと補足と言いますか、先ほど資料3と4を別にとという座長からの話をいただいたのですが、今の趣旨からいくと資料3の方が基本方針と現状と今度の基本計画ということで、対比できるような形で表を一枚にまとめてございますので、そちらの方を見ていただくとわかりやすいかと思います。

座長：そうしましたら、資料3を説明していただいた方が良いでしょう。続けてお願いします。

事務局：それでは、資料3を説明させていただきます。説明といたしましても、これまで検討してきた部分になりますが、左側に基本方針・展示コンセプト、それから展示構成、展示手法、運営という部分、昨年まとめさせていただいたことを抜き出しております。中央に、それに対する現状を提示させていただいて、右側に基本計画、これからまとめていく基本計画ではこういうふうな形で対応していきたいという部分を整理してございます。こちらは特に読み上げませんので、内容について御確認いただければと思います。

座長：それでは、資料3も併せて何かご質問ありませんか。

委員：第5章のところですね。運営計画のところ、やはり第4章できちっと対象とすべき利用者のことが書いてあるのですが、実際には第5章のところでは触れていないので、運営計画のところでは対象とするものは何かということを書きおいた方が良いでしょう。

座長：運営計画のところでは対象となる人ということですね。

委員：例えば、国内外の観光客に向けた情報発信にも考慮するということを書いてありますね。その下にまた、小学校高学年以上の児童生徒が理解できるような展示を心がけますということが書いてあると思うのですが、計画のところではそういう情報発信の対応をして、小中学生にもしっかり対応していくということを書きおいた方が良いでしょう。もう一つは、フォーマット・ツールを充実という言葉ですが、各種フォーマット・ツールってどういうことを具体的に考えているのかというのを教えていただきたい。

事務局：前回は若干説明させていただいたかと思いますが、常設展示で一度作ったグラフィックを作り替えるのは難しいことから、いくつかのバリエーションを作っておき、展示替えの際にグラフィックごと置き換えるという考え方です。

委員：展示器具的なものということで理解していいですか。

事務局：そうですね。

座長：私もちょっとそれが気になって、一般の方が読むにはちょっと難しいかなという気がします。どうでしょう、せつかく「わかりやすく」、「おもしろく」、「やさしく」と来たのであれば、「あたらしく」とか何かそういう言葉で表現したら良いなというふうに思いますが。もう一つ、気になったことが、展示構成のポイントの②番の、感覚的な効果を演出しますという言い方なのですが、何となく言いたいことはわかるのですが、読む人にとってどうかという気がするのですが、良い言葉が何かないでしょうか。一般的な内容を感覚的に把握してもらおうとか、そのぐらいでどうでしょうか。このあたりはまだもう一回、次回、検討する余地がありますので、色々意見がありましたら出していただければと思

います。全体の組み合わせ、対象となる人も加えておいた方が良いとか、他に何かそういった指摘の部分ございませんか。特にございませんか。それではまだ少し時間がありますので、これを見ておいていただいて、次回、集約したいと思います。よろしく願いいたします。それでは、最後の資料4になります。これは前回、写真を見せていただけるということだったのですが、今回いかがでございますか。

事務局：前回、展示候補の資料を紹介させていただきますという話をさせていただいたのですが、今回までに間に合わせることはできませんでした。申し訳ございませんが、次回に写真等を使って実際の展示候補資料をお見せできればというふうに考えております。今回は、展示候補遺跡の一覧表ということで資料4の表をお示しいたしました。今回は、これで簡単な説明をさせていただきます。リスト案でお示ししている遺跡をピックアップしております。前回、遺跡の位置がわからないという話もございましたので、住所も載せてございます。次回は、簡単な遺跡の位置がわかるような位置図も含めて、プロジェクターを使ってご紹介する予定です。表の中央に遺跡の時代と、複数の時代の遺跡もございますので、その横に展示したい時期を入れております。その横に展示候補資料の内容を示してございます。一番右端は、その遺跡でどんな遺構が出ているかということを表記しているだけで、これを展示にどう反映するかというのはちょっとまた別な話になります。少し説明をつけ加えさせていただくと、前回、平成3年を境にという話をしてきたと思いますけれども、これでいきますと平成3年以前に調査された遺跡については、現状で遺物を展示している遺跡ということになりますけれども、1番、2番、3番、それから8番、9番ですね。それと6番のN30遺跡と12番のK39遺跡のもの、今現状で一部展示をしている形になります。現在の展示室で展示している遺跡がこの中で7遺跡含まれていることになります。それに対して、新規に展示したいと考えているものは、それ以外の4、5、6、7、それから10から15までですね。その内、6番のN30遺跡と12番のK39遺跡については、改めてというか、ここは豊富な資料が出ていますので、今まで展示していなかった新たな資料も含めて出していきたいというふうに考えています。ですので、新規の展示予定遺跡としては10遺跡ということになります。非常に簡単な説明ですが、以上になります。

座長：これは、展示にどんなものがあるのかということを考える参考ということになりますので、これを具体的に基本計画が終わってから組み上げていく形になると思いますから、また次回でも見せていただければ十分かと思います。これだけ新しく展示する遺跡が出てくれば、先ほどの平面図に関する資料もかなり見た感じでは新しくなるかなという感じがします。

それでは、本日、色々議論してまいりましたけれども、あともう1回しかございませんので、委員の皆さんの方からこの点はどうなんだということ、これまでのことでも構いませんので、もし言い忘れたことがありましたら、発言していただければと思います。何かございますでしょうか。よろしければ、次回、最後の文案を検討するという形で進めたいと思いますので、どうかよろしく願いいたします。それから、本日の議事録の署名委員ですが、順番で右代委員と川名委員ということでよろしいでしょうか。

それでは、委員の皆さんには、これまでの資料を元に、是非もう一度考えていただければと思います。それからまた、事務局の方でも、本日様々な意見が出ましたので、しっかりと考えてまとめていただければと思います。

それでは、これで議事を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

3. 閉 会

以上をもって、平成24年度第3回埋蔵文化財展示室更新検討委員会を閉会とし、第4回検討委員会の開催日程について連絡し、同検討委員会を終了した。

- 次回 第4回埋蔵文化財展示室更新検討委員会開催予定 平成25年3月6日（水）18時から
（開催場所については、別途調整後に連絡）

この会議要旨は、事実と相違ないことを証明いたします。

平成25年5月11日

埋蔵文化財展示室更新検討委員会委員

署名人 川 名 宏 文

署名人 右代 裕 視